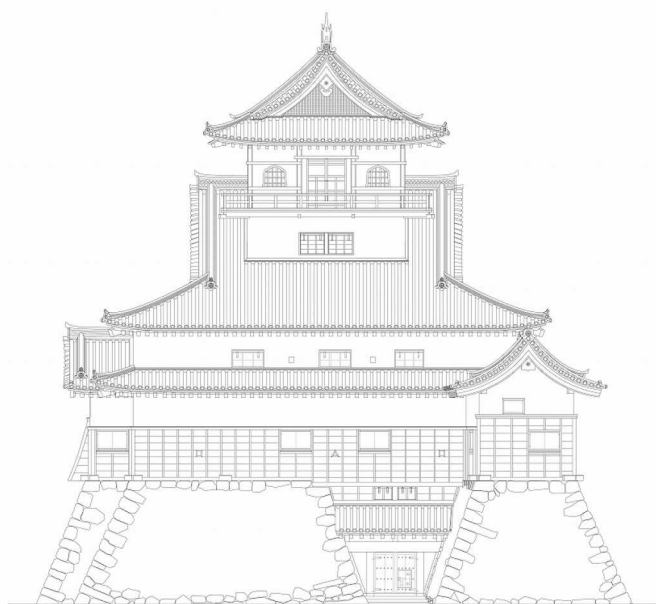




国宝犬山城天守の創建に関する新発見

(従来の定説を覆す調査結果報告)



報告者プロフィール

みつたに たくみ
光 谷 拓 実

(奈良文化財研究所 客員研究員 農学博士)

1947年生まれ

千葉大学大学院園芸学研究科修士課程修了。

奈良文化財研究所入所。

ドイツハンブルク大学木材生物学研究所留学、

京都大学大学院人間環境学研究所客員教授、

国立歴史民俗博物館客員教授、

総合地球環境学研究所客員教授など歴任。

主な著書として、「年輪に歴史を読む—日本にお

ける古年輪学の成立—」、「日本の美術」№421

など多数。

第31回吉川英治文化賞受賞。

専門は年輪年代学。

ふもと かずよし
麓 和 善

(名古屋工業大学 大学院 教授 工学博士)

1956年生まれ

名古屋工業大学大学院工学研究科修士課程修了。

(財)文化財建造物保存技術協会を経て現職。

犬山城城郭調査委員会・犬山城修理委員会委員

その他、五稜郭、弘前城、甲府城、金沢城、名

古屋城、彦根城、安土城、姫路城、鳥取城、丸

亀城、鹿児島城など、全国の史跡整備、文化財

建造物保存修復の委員を歴任。

主な著書として、『犬山城総合調査報告書』(犬

山市、共著)、『城の日本史』(講談社学術文庫、

共著)など多数。

専門は建築歴史、文化財保存修復。



1. 国宝犬山城天守の変遷にかかわる従来の説

昭和36年(1961)7月から40年3月にかけて行われた解体修理工事によって、犬山城天守は、初めに一・二重(一・二階)が建設され、後から三重(三・四階)が増築、さらに南北面の唐破風の付加と、それともなう大屋根と欄干が改築され、現在見る姿〔図1〕になったと考えられた。

そして、その年代については、江戸時代中期以降に記された文献史料をもとに、まず昭和40年に城戸久氏による説が発表され、その後ほぼ同じ史料の異なる解釈によって、昭和52年に西和夫氏による説が発表された。しかしいずれの説についても、問題点があった。

それらをまとめて比較すると〔表1〕のとおりとなる。

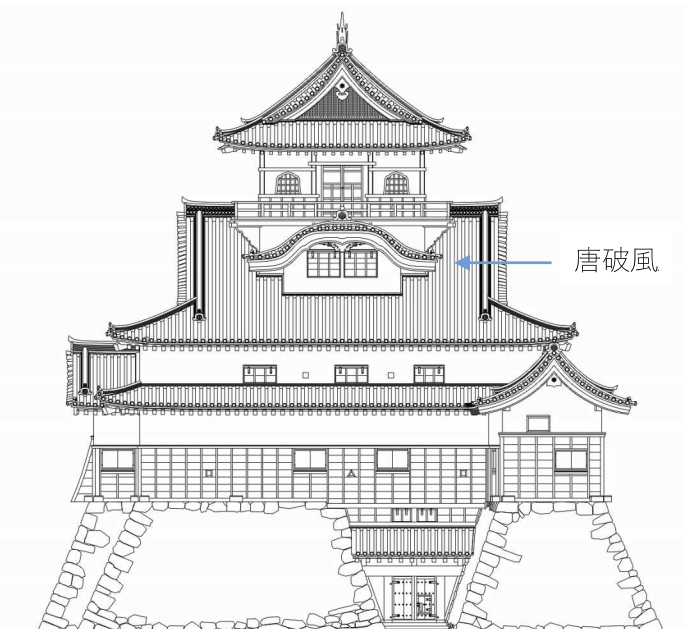


図1 犬山城天守 現状南立面図

表1 犬山城の沿革に関する新旧説一覧表

年代	城戸久説	西和夫説	備考
天文6年(1537)頃	一・二重建設 (城主：織田信康)		
天正12年(1584)			小牧・長久手の戦い
天正18年(1590)			小田原征伐
慶長5年(1600)	三重増築 (城主：小笠原吉次)		関ヶ原の戦い
慶長6年(1601)		一・二重建設 (城主：小笠原吉次)	
元和元年(1614)			一国一城令
元和6年(1620)頃	唐破風付加・大屋根改造、 四周に縁・高欄 (城主：成瀬正成)	三重増築 (城主：成瀬正成)	
正保(1646)頃		唐破風付加・大屋根改造、 四周に縁・高欄 (城主：成瀬正虎の時代か?)	
問題点	高石垣に建てられた天守・天守台を、天文6年までさかのぼらせるのは無理がある。	関ヶ原の戦い後の大規模天守が造営されていた時期に、二重櫓として建てる必然性が理解しにくく、三重目が元和元年の「一国一城令」以降の増築というのも、考え難い。	



2. 犬山城天守部材の年輪年代調査

江戸時代中期以降の文献史料による建設年代の考察には限界があったため、年輪年代法という科学的手法によって年代判定を行うこととした。

年輪年代法で調査対象となる木材は、以下の3つの形状に分類される。

- (1) 樹皮型 (A) : 樹皮か面皮が残存しているもので、年輪年代は原木の伐採年を示している。
- (2) 辺材型 (B) : 一部に辺材が残存しているもので、年輪年代は伐採年に近い年代を示している。
- (3) 心材型 (C) : 心材部のみからなるもので、年輪年代は伐採年より古い年代値を示している。

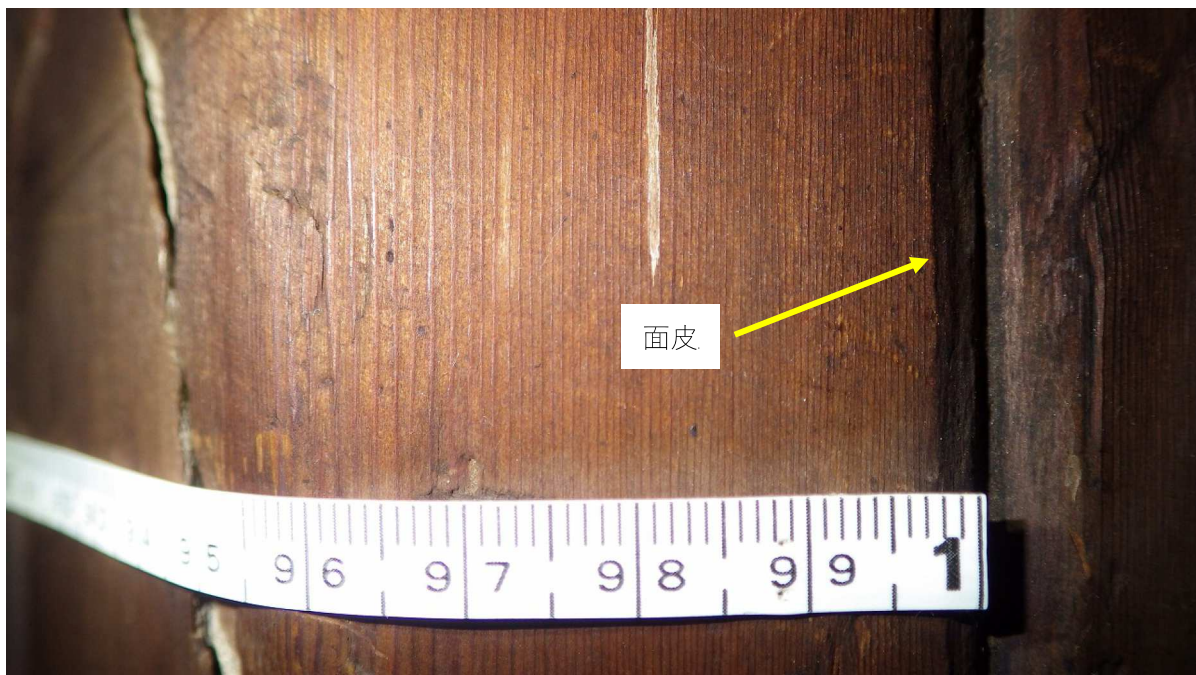


写真1. №31(1階柱)の年輪画像(拡大)(右端に面皮)

調査対象にした部材39点のうち、年輪年代が判明したのは総数29点であった。このなかで樹皮型(A)の2点の部材からは、1階柱(№31) : 1585年〔写真1〕、4階北側床梁(№19) : 1588年の年輪年代が判明した。天守建築の年代を考えるうえで最も重要な年代値である。また、辺材型(B)の部材6点、すなわち4階南側床梁(№20)、4階床板(№36, №37)、4階化粧隅木(№38)、4階持送り(№30)、地下1階床梁(№1)を発見することができた。加えて、№39の北西化粧隅木は心材型(C)であるが、№38の化粧隅木の年輪パターン(186層)と比較したところ、この2部材は明らかに同一材から木取りされたものであることが確認できた。以上、9点の建築部材はつぎの3つの時代に伐り出された木材である。

これまで犬山城天守の創建年代については諸説があり定まっていなかった。本調査で得られた9点の年代情報は、天守の創建や改修の年代解明に大きな手掛かりを与えるものである。

	時代区分	階	部材	点数
(当初材)	天正 (1573~1591)	1階	柱	1
	〃	4階	床梁	2
	〃	4階	床板	2
	〃	4階	化粧隅木	2
(改修材)	元和~寛永 (1615~1643)	4階	持送り(北東隅)	1
	正保 (1644~1647)	地下1階	床梁	1
				9



3. 昭和解体修理の年代判定と変遷に関する考察の再検討

年輪年代法によって、一・二階の当初材とみられる柱(一・二階通柱)の伐採年が1585年(天正13)、三・四階の当初材とみられる四階床梁の伐採年が1588年(天正16)と判明し、同じく四階南寄りの床梁、四階床板2点、四階化粧隅木2点でも1585年から1588年にかけての伐採年が推定された。これらの年代差はわずか3年という結果から、三・四階の工事期間を考慮しても、天正13年から同18年頃にかけて、一階から四階までが一連で建設されたことが明らかとなったのである。

これは、昭和40年の解体修理工事以降疑う余地がないと思われていた従来の定説、すなわちまず二重の天守として創建され、後に三重が増築されたという説を覆す驚くべき事実である。

そこで、疑義が生じた修理工事報告書の調査内容を改めて再検討した。修理工事報告書には、二階小屋梁は当初のものが現存していて、梁の上に寄蟻(よせあり)穴があることから〔写真2〕、創建当初は三重目がなく、ここに二重目の大屋根があったと判断している。ところが、写真を見ると、当該部分の梁5本のうち、4本には確かに寄蟻穴を確認することができるが、西から2本目の梁には寄蟻穴がない。そこで、この寄蟻穴がない梁と、寄蟻穴のある4本の梁の表面加工を見ると、いずれも蛤刃の鉾(ちょうな)で研っており、同時期の部材であると判断できる。すなわち、工事途中の計画変更で、ここに小屋束(あるいは三階の床組を受ける柱の可能性もある)を立てることを止めたことがわかる。

また、今回三重目の小屋裏(屋根裏)〔写真3〕に上がって、すべての部材の新旧や大工道具による加工痕を詳細に調査したが、三重小屋裏の当初材は、いずれも一・二重の当初材と同様の加工痕であることが確認でき、これらが同時期の部材であると判断できた。

さらに、修理工事報告書に記された二階から三階に上がる階段は、現状の位置ではなかったというのは誤りで、当初から現状の位置であったことも確かめられた。

加えて、創建当初の年代のみではなく、四階縁の持送りからは、1620年前後の伐採年が推定され、城戸久の南北面の唐破風は元和6年頃(1620)成瀬正成によって付け加えられ、それにとまって大屋根が改修され、欄干が周囲にめぐらされることになったという説を、科学的に裏付けることもできた。

また、穴倉(地下)一階の床梁からは、正保年間(1644年~1647年)の伐採が推定され、この床梁とその両側に立って床梁を受ける柱は、薬医門(やくいもん)を転用した出入口構えの修理と一連の補強材である可能性が高く、この修理は修理工事時に推定された文化頃ではなく、正保年間に行われたことも明らかとなった。

なお、今回の調査では、犬山城にかかわる従来の研究で用いられた文献史料には、あえて触れなかった。いずれも江戸中期以降の二次史料である。年代特定の根拠となる確かな史料がな

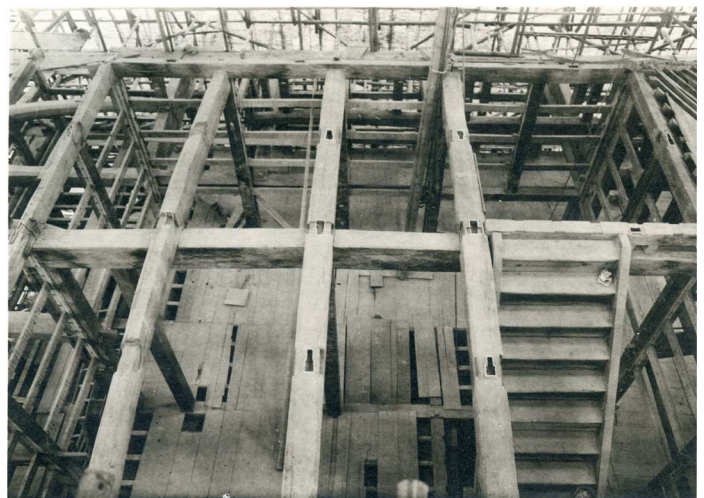


写真2 梁に残る寄蟻穴 西から2本目の梁には寄蟻穴がない。
(『国宝犬山城天守修理工事報告書』所収)

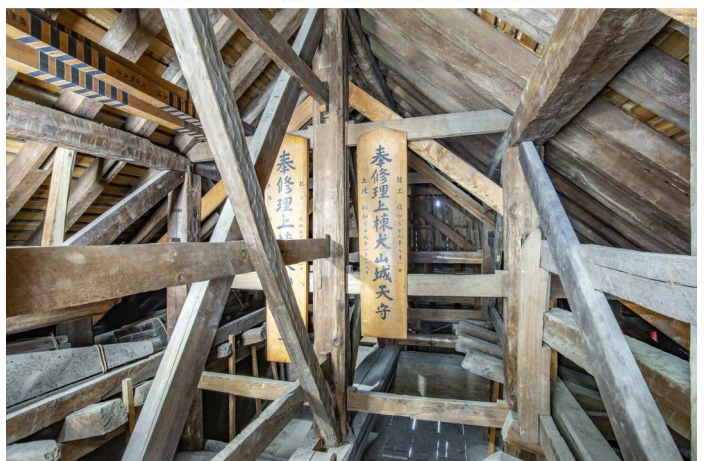


写真3 三重目小屋裏(屋根裏) 三重小屋裏の当初材は、
いずれも一・二重の当初材と同様の加工痕である。



ければ、これらの二次史料に頼るしかなく、先学もその解釈に苦慮されたことには敬意を表するが、年輪年代法という科学的手法で部材そのものの年代が判定でき、部材に残る加工痕、すなわち当時の大工の仕事の痕跡を見ても一連で建設されたと見れるのであるから、天正13年(1585)から同18年頃にかけて、一階から四階までが一連で建設されたことは、もはや疑う余地がない。

4. 犬山城天守天正末期創建の歴史的背景

一・二階の当初通柱が伐採された天正13年(1585)は、小牧・長久手の戦いの翌年にあたる。当時の犬山城主は、織田信雄方の中川定成である。工事にかかって間もないころ、天正13年11月27日(1586年1月16日)と29日(同18日)の二度にわたって、中部地方は大地震に見舞われた。いわゆる天正大地震である。いまだ木工事はそれほど進んでいなかったであろうが、天守台石垣はある程度築かれていたかもしれない。城戸久説の一・二階天文6年(1537)築城説において、最も疑問視されていたのが天守台石垣の成立についてであったが、天正13年であれば、天守台石垣の上に天守が立つというのも全く問題ない。

翌天正14年には織田信雄の重臣土方雄良(後の雄久)が犬山城主となるが、雄良は清洲で信雄を補佐するため、弟武田清利を城代とした。三階床梁の伐採年が天正16年(1588)であるので、城主が変わったとはいえ、この頃は織田信雄方の清洲に次ぐ第二の城として、天守の建設工事は続けられていた。

ところが、その工事が終わって間もない天正18年(1590)、豊臣秀吉が小田原北条氏(後北条氏)を降伏させ天下を統一した、いわゆる小田原征伐後は、犬山城主は秀吉方の三好吉房に変わり、さらに文禄4年(1595)には同じく秀吉方の石川光吉に変わった。

犬山城天守は、小牧・長久手の戦いの直後に織田信雄方の城として築城が始まり、豊臣秀吉の小田原征伐の直前に完成をみるが、皮肉にも秀吉方の城となったのである。

築城から約10年後、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで徳川家康を総大将とする東軍が勝利すると、家康の四男松平忠吉が忍城から移封されて清洲城主となり、その付家老小笠原吉次が犬山城主となった。西の豊臣方から東の徳川方に代わったのである。その後、慶長12年に平岩親吉、元和3年(1617)からは成瀬正成が犬山城主となって、明治6年(1873)の廃城まで、成瀬家が代々犬山城主となった。

四階周囲の縁の北東隅に使われている持送りは、元和6年(1620)前後の伐採年が推定されているので、南北面の唐破風が付加されると同時に大屋根の棟を89cm下げ、妻を約半間前方に出し、三層周囲に縁と高欄が廻らされたのは、従来に城戸久説と同じ、成瀬正成の代にとということになる。

天正末期の創建から30年ほどたち、この間に目まぐるしく城主が変わるだけでなく、織田信雄方から豊臣秀吉方を経て徳川家康方の軍事的要衝の城となり、慶長20年に大坂の陣が終結して、いわゆる元和偃武(げんなえんぶ)を迎えるが、同年の一国一城令の後も存続が認められ、ようやく徳川政権の安定化が進んだ時期に、唐破風という装飾的要素が付加されて、現在見るようにその偉容を整えたのである。

5. 日本城郭史上における犬山城天守の価値

犬山城天守は、昭和初期の日本城郭史研究の草創期から、入母屋造の大屋根の上に望楼がのった外観と構造から、天守発生初期の特徴を備えていると、高く評価されていた。

昭和解体修理によって、当初は石垣上二重で建設され、のちに三重部分が増築されたということが確認されると、それが疑われることなく、江戸中期の文献史料をもとに、天文6年(1537)創建の旧説と慶長6年(1601)創建の新説が発表された。しかしながら、この二説に対して、考古学や歴史学の分野からも疑問が呈されていた。

今回の年輪年代法による年代測定調査によって、天正12年(1584)の小牧・長久手の戦いの直後から、天正18年(1590)の豊臣秀吉による小田原征伐の直前までに、織田信雄方によって一重から三重までが一連で建設されたことが実証され、やはり現存最古の天守であることが明らかになった。

創建当初の姿に復原すると表紙の図のようになる。日本城郭史研究の草創期からいわれていた、天守発生初期の特徴を備えたものとして、日本城郭史上の価値を改めて高く評価したい。